**増補版 野生動物管理－理論と技術－**
**羽山伸一・三浦慎悟・梶　光一・鈴木正嗣 編**

2016 年 7 月・文永堂出版発行
定価（本体 7,200 円＋税）

評者 酪農学園大学 教授 浅川満彦

2012 年に刊行された『野生動物管理－理論と技術』（以下，旧版）について，つい先日，書籍紹介を書かせて頂いたと思っていたが[1]，その 4 年後の今年，本書が 2 つの章と 1 つのコラムを加え，36 頁増えて刊行された。総頁の増加分には日本語索引のまるまる 1 頁分も含まれる（それに比べ，外国語索引の量は旧版とほぼ同じ）。重要な専門用語の急増は，この分野を専攻する学生さんにとっては，まことに気の毒な話だが，たった 4 年でこれだけの増加があることは，まさに発展途上のフィールドであるのだと諦め（？），前向きに受け入れて欲しい。

本書の基本的な枠組みは旧版を踏襲しているが，旧版刊行後に，旧来の「鳥獣保護法」が「鳥獣保護管理法」に変革するなど法制度が大きく変わったため，この更新が不可欠になったことが，この増補改訂版出版の目的であった。新旧のこれら両法規の違いは，前者が増殖・拡大，後者が削減・縮小で，ベクトルが全く異なる。また，後者では捕獲事業やその事業者なども盛り込まれ，より具体的な内容になっている。おそらく，本書に関わった編者あるいは著者らの多くが，新たな法規施行に関わったと想像されるが，それでも彼らが描く「望ましい管理」とは，この新たな法規が目指す狭小なものではないことも宣言されている。本書「増補にあたって」を一読するだけでも，この「保護管理」という概念と実際に関わる物事が，一筋縄ではいかないことが推し量れるであろう。

さて，新たに加えられた章は「外来種管理の考え方」と「哺乳類の生息数調査法」，コラム「食性分析」であった。すべて有益な内容であり，特に，「哺乳類の生息数調査法」は日本野生動物医学会主催の野外実習を本学で行う際，コンパクトで良好なテキストとなろう。鳥類に関して注目されたのは「狩猟鳥個体群と生息地の管理技術」で，旧版でカモ類・キジ類の順で記載されていたが，本書で逆になっていた。最新の鳥類分類体系を反映したものの，狩猟鳥としてのウズラが除かれ，また，エゾライチョウの急減が深刻なこと（更新されたグラフから読み取るに）などから，このような軽重の逆転があったのかもしれない。

このように追加された章以外でも，特に，旧版発行後に公表された原著・書籍などを引用文献に追加したものでは，若干の改訂が認められた。その中でも，本書刊行の理由となった法制度の変更については，「野生動物保護管理に関わる法律」の章で詳述されていた。ただ気になったのは，本章「今後の動向」は，旧版と同じで，2013 年以降のことが記されていなかった。しかし，このあたりは，前述した「増補にあたって」の内容を読者自身が読み込めば宜しいのであって，かえって，学生さんにとっては学習効果が高い作業になるであろう。

**引用文献**

1）浅川満彦（2012）：ズー・アンド・ワイルドライフニュース（35), 28.